

大庄屋文書から見た酒田の世相（四）

須藤 良弘

『研究論集』5・6・7に続いて、内町組の大庄屋・伊東家と米屋町組の大庄屋・野附家の文書（酒田市立光丘文庫所蔵から江戸期の酒田の世相を見てみたい。なお、文中の句読点は筆者が付け加えたものである。

一、三十六人衆と大庄屋はどちらが上か

庄内藩の町方支配は一般的には町奉行の下で、大庄屋・肝煎となっており、酒田町の内町組と米屋町組はその通りで、各組に二人ずつの大庄屋がいた。ところが酒田町組には渡部隼人と栗林新右衛門の二人の大庄屋が代々世襲しながらも、外に三十六人衆（長人）から出ている上林・鍬谷・二木の年寄と長人がいて、庄内藩町方支配の下部組織となっていた。酒田町組は大庄屋・肝煎の線と年寄・長人の線と二重支配的な関係であった。

文治五年（一一八九）平泉・藤原氏滅亡の時、藤原秀衡の妹、或いは後室とされる徳尼が三十六人の従者を引き連れ、宮野浦に逃れて来た。この三十六人を三十六人衆と称し、酒田草創としている。私はこれは伝承であり、酒田の三十六人衆の出現は堺などと同じく戦国時代と考えている。

酒田三十六人衆は本町に住居し、問屋などの家業を営む富裕な商人層であった。当然、富を失い、本町に住居できな

くなると、別の富裕な商人と三十六人の役儀は交替された。三十六人衆と大庄屋の間で、書類の受付、殿様の出迎いや年頭のあいさつ（御目見）での席順でどちらが上席かで度々争われた。

「三十六人御用帳」（『酒田市史料篇一』）によると、寛保元年（一七四一）町奉行所から年寄・長人の諸願の書き付けは今後「月番之年寄大庄屋宛所」に出すようにとの申し付けがあったことから、「拙者共三十六人之儀ハ古来より諸願等ニ不限、大庄屋の支配請不申、諸願書付大庄屋江差出申候趣、先格違、迷惑至極仕候、」と年寄・長人が反発し、殿様が亀ヶ崎城に來た時の「松原御出迎」「席順」は「御町奉行・年寄・仲間・大庄屋・」としている。仲間とは長人のことである。御目見の席順も年寄・長人・大庄屋と主張している。

野附家文書『天保八西四月 野附控』の「乍恐以書付奉願候」に、「御目見只今之次第」がある。これによると御目見の席順が「酒田町年寄式人、同長人、同大庄屋兩人、内町組大庄屋兩人、米屋町組大庄屋兩人」、「酒田町長人、三町大庄屋より上二而御目見申上候由二而」と、大庄屋より年寄・長人が上席としている。

しかし、大庄屋側は元禄期の酒田町奉行「帰山森右衛門様御代二も」三十六人衆側から、「式日之格式、大庄屋より先ニ御逢被下度」と申し出があったが、帰山は「御目見之儀ハ兎も角」としても、「役所ニ而、平生御用」の場合は、「年寄・大庄屋之分無之」と仰せられ、「先々より年寄・大庄屋同席ニ長人より先ニ逢来候」と記している。

享保前期の町奉行・加賀山平助様の代の三年目からは「年寄・大庄屋ト二座ニ分り申候得共、長人江者拙者共より跡ニ御逢」で、長人とは大庄屋よりも後で逢ったとしている。

ところが享保後期の高橋万右衛門様の代になると、「内々より願入」があったせいと思われるが、「年寄・長人行事ニ御逢被成、次ニ大広間ニ江御出被成、惣長人ニ御逢、次ニ拙者共ニ小座敷ニ而御逢」で、三十六人衆側からの内々の願いから、最初に年寄と長人から選ばれる三人の月行事と逢い、次に大広間で長人全員と逢い、その次ぎに小座敷で三町組の大庄屋と逢った。この事については大庄屋側は不満であった。

「諸願書付」の提出先について三十六人衆側の反発を書いたが、大庄屋側でも「豊原多助殿御勤中」、「三拾六人共」が「月番之年寄大庄屋宛名ニ而差出候」ようにと仰せ付けられたのに、「長人年寄申上候次第」があつたせいか、「家業方之儀ニ付諸願八年寄・長人共」は「年寄・大庄屋宛ニ而差出候様、其後、年寄宛ニ而差出候様、被仰付候」となり、大庄屋が省かれたことから、ますます「心得違ニ相成候」と怒りを表している。

さらに、大庄屋は「甚敷ものハ内証打寄ニも私共末席差置候」とし、「御役威ニも相拘り、嘆敷次第奉存候」とし、「不寄何儀、年寄・大庄屋江宛願書差出候様、被仰付被成下度」と、どんな願書でも年寄・大庄屋宛にしてくれるようお願いしている。

そして、「大庄屋之儀ハ古来より御町方支配被仰付、三町六人ニ限、相勤罷在候」であつたのに、元禄の頃、年寄が申し合わせをし、寸志金を差し出し、年寄三人が十人御扶持方になつた。其の際、「大庄屋江加り、御町方御用相勤申度段奉願」ことにより、仰せ付けられたものとし、町方支配は大庄屋の方が三十六人衆よりも先であると主張している。

三十六人衆と大庄屋の序列問題は明治初期まで続いているが、三十六人衆が上位に置かれていたようである。天保十三年（一八四二）、庄内藩主の家督相続に、酒田町からお祝いとして大殿様と殿様に鯉節が献上されているが、伊東家文書『御用帳』によると、その序列は御町年寄、年寄格、三拾六人、大庄屋、大庄屋格、御用達、御目見医、米屋町組長人である。

酒田町組では、三十六人衆以外でも新興の富豪や藩への上納金などが群を抜いて多くなると、年寄の下に位置する「年寄格」になる者もいた。豪商となつた本間家や白崎家などがそうである。寛政五年（一七九三）、内町組の豪商・伊藤四郎右衛門も多額の寸志金を上納したことから、年寄格に仰せ付けということが出て、大庄屋に諮問があつた。大庄屋側は驚き、内町組には年寄はなく、大庄屋の上に年寄が出来ては悪い事になると、次ぎのように強く反発している。

「先年、本間正五郎年寄格被仰付候、是ハ三拾六人役之者ニ而、年寄之得支配候事故之儀と被存候、内町組ハ年寄と

申者無之、御存知之通大庄屋斗御座候、然者、大庄屋之上江出候而ハ、諸事致差図候ニ悪敷事茂可有御座」であつた。結局、年寄格でなく、「大庄屋格」である。「大庄屋格被成下、御紋付上下被下候 伊藤四郎右衛門」(伊東家文書『御用帳』)。

二、大庄屋等の処分・相続

町役人に対する処分は度々見られる。元禄二年(一六八九)二月、「十二年以前追放被仰付候酒田御町年寄之内、上林五郎左衛門義、久しく他国に罷在」が、同じ御町年寄の鑑谷、加加屋(加賀屋)、酒田町組大庄屋・渡辺隼人、粕谷掃部等の御町肝煎から御町奉行所に出された。上林家は酒井家の庄内入部以前から続く古い格式を誇る町年寄である。「上ノ山出入」事件によって追放されたものであるが、上ノ山出入については不明である。追放が解け、閉戸になつたものと思われる。

元禄五年になると、「上林七郎左衛門義、上ノ山出入二付、春より閉戸被仰付候處、上野山御役人衆より七郎左衛門義存居候誤無之段御上御状参候二付、閉戸御免被仰付候、然共年寄役並問屋自今已後不仕」、七郎左衛門屋敷並名子屋敷五軒・御宿小路蔵地式軒、×拾軒御役下被仰付候」(伊東家文書『御用永録』)。

五郎左衛門と七郎左衛門は同じで、上林家が問屋家業の中で、上の山とトラブルとなつたものと思われる。上の山の役人から七郎左衛門が事件と関係ないと酒田に報告され、閉戸御免となつた。ところが年寄役と問屋は以後禁止され、さらに三十六人衆の特権である屋敷に税のかからない「無役屋敷」は取り消され、税のかかる「御役下」とされた。元禄九年の「町屋敷割図」でも、年寄・長人の三軒屋敷から一軒屋敷が「無役」であるのに、御宿小路に面している町年寄・上林七郎左衛門の三軒屋敷は「三十分役」となっている。

宝曆十年（一七六〇）、「酒田御町年寄かか屋与助年寄役儀取上ケ、拾人扶持共ニ取上ケ、閉戸可申付候」、「酒田御町大庄屋渡部隼人 役儀御取上、閉戸可申付候」、「臺町肝煎孫兵衛 役儀取上、閉戸可申付候」（伊東家文書『宝曆十年御用控』）。この処分の理由は記されていない。

大庄屋役相続は原則的には世襲である。しかし、延宝九酉年（一六八二）内町組では、「三丁目弥右衛門大肝煎役義御訴訟申上」、御役御免となり、替わつて「跡役伊東弥左衛門ニ被仰付」た（伊東家文書『御用永録』）。御訴訟の内容はわからない。

米屋町組でも貞享二年（一六八五）、「池田吉兵衛儀、岩堀孫衛門跡役被仰付候」（伊東家文書『池田家御用帳之内書抜』）。さらに遠山氏に替わつて、「米屋町大肝煎役野附七郎兵衛ニ九月六日被仰付」となつたのは貞享三年である（『御用永録』）。大肝煎の名称が大庄屋に変わったのは天和三年（一六八三）とされている。

万延二年（一八六一）、酒田町組で代々大庄屋役を勤めた栗林新右衛門は何にかわらないが、不調法の事があり、隠居・謹慎を命じられた。その際の相続について、次ぎの「乍恐以書付御内意奉伺候」（野附家文書『万延二年 御用留帳』）が、内町組大庄屋・佐竹弥右衛門等から町奉行所に出された。

「私共同役栗林新右衛門儀不調法之義有之、旧臘隠居、急度慎、俸新吉江相続被仰付様、私共茂恐入奉存候、依之恐多奉存候得とも、御内意奉伺候、新右衛門俸栗林新吉儀当酉十七歳ニ罷成候ニ付、数代大庄屋御役相続被仰付、相勤来候家筋之者ニ御座候間、以御慈悲、右大庄屋御役並年々被下米共新吉江是迄之通被仰付、被成下置度奉存候」、そのようにして頂ければ私共大庄屋も有り難いので、御内意を伺いたいというものである。

御町奉行所ではそれを受けて、庄内藩の中老である朝岡助九郎に申し上げ、次のような御達を得て、大庄屋側に伝えている。「右御紙面之趣致承知、御地大庄屋共内意書助九郎殿江差上候處、別紙御紙上之通御達御座候間、左様御承知被成度候、右御役可得御意、如是御座候 以上」。

三、隠し荷事件

港町酒田では海運・水運に関して多くの問題が起きた。大石田船頭と酒田船頭との間でも積み荷、遭難した時の弁償、廻船宿、税などで多くのトラブルが発生したが、ここでは隠し荷の二例だけあげる。

貞享三年（一六八六）、「大石田船頭善三郎船」に「上袋小路五郎助一人乗り船にて塩四斗入十四俵・塩鯖七固隠し為積申候所」、「船役人新堀村迄追かけ」捕まえられた。「船宿六之丁本間彦兵衛」に「過料三両」、「五郎助妻子共二、古例之通御町追放」となった。さらに「自今以後、ケ様之所法破候者二者、何方之者にも酒田中二而、宿貸不申候様、御町奉行所より被仰付候」。

元禄二年（一六八九）、「隠荷茶積申候問屋並船頭共過料金出申候覚」に、「茶四十二本 茶積申候宿上林七郎左衛門」、外に船宿の泉屋六右衛門・加、屋太郎左衛門・船頭に「過料金三十六両」である。「内九両ハ隠荷物積之宿三人より出ス、廿七両ハ右之荷積候船頭水主共九艘之舟之者共出ス」（伊東家文書『池田家御用帳之内書抜』）。

四、天保の転封事件と白崎家

天保十一年（一八四〇）十一月、幕府は酒井家に長岡への移封を命じた。庄内ではそれに対する激しい反対運動が展開された。伝馬町に店を構えて、三十六人衆「年寄格」になっていた豪商・白崎五右衛門は江戸に登り、川越藩に接近した。転封阻止のためともいわれるが、人々には転封反対運動への裏切りと思われ、川北百姓から屋敷が襲われ、投石などされた。十二年七月、幕府は転封命令を撤回して騒ぎはおさまった。

白崎五右衛門に対する処分は翌十三年三月、次ぎのような「申達之覚」として記録されている。襲われたとは逆に、川北百姓に乱暴をはたらき、酒田で騒ぎを起こしたことで、用向きも届けずに江戸へ登ったことが理由で、処分も五人扶持の内、二人扶持を取上、隠居に、でも伴が跡を継ぐという、転封反対運動への裏切りとしては軽いものと思われる。

「酒田御町年寄家一代御流頂戴格 白崎五右衛門 其方去暮中、川北百姓共二両度迄致狼藉、酒田町中騒敷いたし候始末、去々年中江戸江罷登候節、其向役筋届も無之、不埒之至二付、五人御扶持之内、式人御扶持方取上、隠居可申付」、三人御扶持方伴江被下置相続、御町年寄格被仰付」（伊東家文書『天保十二年三年御用帳』）。

五、新遊女町の成立

港町の酒田で船場町と今町だけに公許の茶屋家業を営む者が居住していた。そこに郊外の高野浜で「茶屋家業同様」にしている者三十六名から、赤川を登り、鶴岡の藩主へ荷物を運ぶ一人乗り船（無棚船）の運送費用の献上願いが文久三年（一八六三）二月に年寄・大庄屋から出された。「中町屬町西濱新屋鋪之者共三十六人申合、鶴ヶ岡江為御登之無棚船金百両分相雇寸志仕度」。

同年同月、酒田町奉行・金井国之助から次ぎのように、茶屋家業許可願いが藩に出された。それは河口の港の位置がだんだん変わって、北の方に海船が着くようになったことから、船乗りも多く入り込み、今までも内々で茶屋家業同様に行っている者もあり、禁止することは困難となった。むしろ正式に許可して掟を守らせたほうが、取締上良いのではないか、船場町・今町の者もこのような状況になっては、支障があるとはいわれないようである、というものであった。

「書面之通寸志指上申度旨内意申出候、従御町役人共申出候、中町屬町西濱新屋鋪之儀者、水戸口川形追々北之方江

附寄、近来右近辺江海船繫居候事ニ相成候事ニ付而者、水主共便利之為、連々入込居候、自然是迄茂内々茶屋家業同様致居候由、只今手ヲ入候共、容易ニ差留可申見込茂無之、結局表向右業体御聞置被成下候而、其上夫々掟者広く為相守候ハハ、却而御締茂相立、穿鑿之もの等有之候節者、一助に茂相成可申、尤今町船場町迎茂、此節に相成、指障可申立様茂無之事ニ相聞候ニ付、今度御町役人共申出候儀、新屋鋪御願之通、御聞置被成下度儀と奉存候」(野附家文書『文久三年 酒田町組米屋町組 御用留牒』)。

願いは聞き届けられ、船場町・今町に次いで、「新町」の茶屋家業は公許され、酒田三遊郭となった。

六、殿様の死去

明和三年(一七六六)四月五日、亀ヶ崎城代・酒井図書より「殿様御卒去」につき、惣御家中にまかり出るよう御触書が出され、「惣名代」として年寄の加賀屋永蔵、酒田三組の大庄屋である栗林新右衛門・伊東弥十郎・野附圓太も同日出頭した。「殿様先月晦日、御養生不被相叶、御卒去遊候旨申来、奉絶言語候」で、次ぎのような「慎」が仰せ付けられた。

「一、鳴物普請御停止ニ候 一、面々居宅火之元、別而入念可被申候 一、面々者勿論、召仕等迄月代為剃申間敷候」。本人は勿論、召使のさかやきも剃ることの禁止である。さらに「支配有之面々ハ、支配へも御申付」で、「一、殺生堅御停止 一、普請 十四日慎 其後穩便 一、風呂屋 三日慎 其後穩便 一、狛師 三日同断 一、諸職人 七日同断」、商売は家の内で「商候様被仰付」、「触壳御停止」、「年寄・大庄屋・長人昼夜火之廻り〱肝煎・組頭・居町之諸番人無油断様可申付候」(野附家文書『諸御用控帳』)などである。

七、鮭漁と八ツ目漁の争い

最上川下流では鮭漁と八ツ目うなぎ漁が行われていた。その漁法の一つに鮭では地引き網による大網、八ツ目では「どう」を使う筒漁である。宝暦十年（一七六〇）、鮭漁者が漁の邪魔になるとして、八ツ目漁のどうをつなぐ縄を切ったことから争いが起きた。

「肴町五兵衛鮭網場障りニ相成候由ニ而、臺町之者共積置候八ツ目縄切候ニ付」、八ツ目縄を切られた者共から「願書」が出され、五兵衛からも「差書」が出されたので、御役所へ申し上げたが、「内々ニ而、相片付可申」ようにといわれた。しかし、「埒明不申」であつたので、再び申し上げた結果、五兵衛は「八ツ目縄廿八房之内、拾四房」弁償し、「御呵」となつた。さらにこの年十月、「細肴町弥蔵鮭大網獵と臺町・獵師町之者共、八ツ目獵之儀ニ付、出入に及び候、臺町・獵師町之者とも差置候八ツ目どう式拾八房弥蔵切流候」で「八ツ目獵之者共訴出」、両者の吟味となつた。弥蔵の申し分は「八ツ目獵之儀ハ、十一月十五日より翌三月中迄獵いたし候定法故、鮭網之障ニ相成候得者、前々より八ツ目どう切流候」であつた。

それに対して八ツ目獵の者共の答弁は、「獵方之儀、月ニ定法と申儀無之候」で、八ツ目が登つてきた時に漁をしていると主張した。しかし、「双方共ニ證據ニ可相成定書無之候」であつたが、「弥蔵是まで心得違獵方」となり、「弥蔵切流シ候八ツ目胴式拾八房之内、拾四房今度弥蔵相弁、八ツ目獵之者共へ相返可申候」（伊東家文書『宝暦十年 御用控』）となつた。

八、罪と罰

酒田町には盗みやばくちなど多くの犯罪が発生している。為政者はそれに対して治安の維持に努めている。

元文三年（一七二八）、「御町方所々二而、此節怪敷様子之儀共相聞候」、これによつて「町離非人共へも被申聞ニ被成候」という「申達候」が出された。

それは、「怪敷様子之者、及見聞二者、無用捨注進」するように。「怪敷様子之者召捕候哉、又者致注進候者有之候者、為褒美金拾両宛、可被下置候」で、怪しい者を見たらすぐに注進し、捕まえたり、知らせたりした者には褒美として金十両下されるのである。さらに「右同類たり共、訴人ニハ其罪を免シ、為御褒美金拾両被下候」で、怪しい者の仲間であつても訴え出れば罪を許し、金十両の褒美も出すというものである。

南千日町にある瑞相寺は「千日寺」、「千日堂抱念佛堂」、「浜の念佛堂」などと称され、旧暦七月二十六日の夜は「月見詣」の祭礼で賑わい、ばくちも行われていた。次ぎはばくちの禁止と出店の制限である。

元文三年七月も「明廿六日之夜、毎年之通、浜千日堂へ参詣之者多可有之」で、「右之場所二而、少之博奕等も堅不為仕、其外みたりかましき儀無之様ニ可仕」、「茶や相かけ候者共へも、右の旨急度申付、茶やハ宵之内計ニ仕、四ツ時よりハ不残取仕舞」（伊東家文書『内町組 御用留控帳』）とある。

町の治安維持の末端には「自身番」や「辻番」があり、自身番は「亭主」二人ずつ勤め、辻番は雇いで拍子木を打つて町廻りであつた。次ぎは酒田町の全部の番人の勤務怠慢事件である。寛政三年（一七九七）、「御役所御免廻り被成候所、御町中惣而諸番怠り候内、臺町内匠町大工町之番人、別而不埒之至ニ付、翌廿五日御役所江被召呼、渡辺多助殿を以御尋被成候所、大工町之番人申上方相違ニ付、手錠被仰付候」（伊東家文書『寛政三、四年 御用控』）。

次ぎは明和三年（一七六六）三月十三日、盗みで斬罪になるところであつたが、盗品を返したことで追放となつた。追放になつたうえは決して庄内には帰つてこない。もし帰つてきて隠れていた場合はどんな罰でも受けるという「筑後町 甚四郎 縄下」から酒田町奉行所への「置證文指上候事」である。

「拙者儀、粕谷小路左次兵衛所より着物式ツ盗取、質物へ差置、其外面所へ忍入候二付、斬罪可被仰付所、其品相返二付、此度別段之以御慈悲、吹浦口より他所御追放被仰付、難有仕合奉存候、此末御領内ハ勿論、松山・羽黒・大山御領へ立帰り申間敷、別段被仰付奉畏候、若此已後、御構之所へ立帰り、隠忍罷在候ハハ、何様之曲事ニも可被仰付旨、奉得其意候、為後日置證文指上申候以上」（野附家文書『諸御用控帳』）。さらに同日、甚四郎親類や五人組からも同文の「指上候御請證文之事」が出されている。

次ぎは五年前に追放された船乗りが、自分の子供を心配してひそかに帰つてきて捕まえられた事件で、「山王道町重三郎女房」から寛政三年に出された「御尋二付、乍憚口上書を以申上候」である。

「拙者夫重三郎儀、五年以前未八月中不屈之儀有之、御吟味之上吹浦口より他所追放被仰付候所、其後立帰罷在申候趣被及御聞二而、昨夜御同心中召捕二被向候二付、其節之次第、尚又立帰罷在申候趣、無隠申上候様二と被仰聞」。重三郎が帰つてきた次第を隠すことなく話すよう女房は奉行所から命じられた。

追放された重三郎は知り合いの最上の弥八方に借宅し、「大石田船に乗組、此方へも度々往来」していた。家族は八人で、二人の仲は御城米積船に雇われ、最上に登ることもあつた。重三郎は「大勢之子共を案事参候得共、四五日斗宛隠忍居候より外、長ク留置不申候」（野附家文書『御用控』）。関係者の処分は記録がない。

次ぎは十二年前の年貢米の不正事件に関与したものが、長く牢入りになっている元御蔵番の藤五郎が高齢で病氣であるとして、牢から出され追放処分になつたが、もし帰つてきても隠したりしないという「伴藤次郎」と「同親類山王道町吉蔵」等三名から寛政三年に出された「御請證文差上申事」である。

「拙者共親類、故御蔵番藤五郎儀、不屈之儀ニ付、拾貳年以前より永牢被仰付候所、極老之上病氣ニ付、去十一月牢下ケ被仰付、今度以御慈悲、吹浦口より他所御追放被仰付、拙者共迄難有仕合ニ御座候、此末御領内者不及申上、大山・松山・羽黒領江立婦、隠忍罷在候段及見聞候ハハ、早速御注進可申上候、若隠置候ハハ、急度可被仰付旨、奉得其意候」(前同)。

次ぎは妙法寺を舞台に、檀家を巻き込んださき事件で、下内町五郎七と肝煎与三郎から出された寛政五年の「乍憚以書付申上候」である。

「妙法寺ニ御客人有之、右御客人申聞候二者、木綿類少々相調申度候ニ付、方丈へ承合候所、秋田町治郎兵衛者旦那二候間、夫より相調候様被申候得とも、仕入等いかか之見せ(店)ニ候哉と私へ聞合候ニ付、下内町五郎七と申もの店者仕入も宜、勿論親類ニ候間、値段引下候様可申付」として紹介したところ、「かたりニも可有之哉と驚入、夫より今日迄内々ニ而相尋候得共、右之男居合不申」(伊東家文書『御用帳』)。被害額は、「品数十五品、代々金壹両壹歩錢廿五貫五百文」である。

寛政五年の迫いはぎ事件。鷹町作兵衛の女房が夜四ツ時頃、中町傳助より錢三貫文を受取り、帰る途中「中小路より少し下り候所ニ而、後よりむりニ右錢奪取可申といたし候もの有之候ニ付、相渡間敷と色々相働候得とも、女之儀故、奪被取候ニ付、追かけ」自身番人へ知らせ、さらに追いかけたが見失った。

同年、ばくちで処分。「二月廿五日之夜、筑後町多吉茂兵衛と申者之家にて博奕宿いたし候趣申出候ニ付、御内意申上、打之者共」酒田町三組で十四人、内町組の大庄屋伊東家「支配」の外野町弥吉等三名は「手錠」。

同年、奉公先で横領、盗賊入りとうそ。「外野町勘三郎伴勘七と申者、浜町善三郎方へ奉公ニ罷在候所」、「反物二反」都合六品盗取、外より盗賊入躰ニ取越拵」したことで、「吹浦口より他所御追放」(前同)。